

安井友康、千賀愛、山本理人

リンデン特別支援学校の教育実践と分教室による共同教育：ニーダーザクセン州ローテンブルク地域の調査から、北海道教育大学紀要（教育科学編）、61(2)、61-76、2011

リンデン特別支援学校の教育実践と分教室による共同教育

ニーダーザクセン州ローテンブルク地域の調査から

安井 友康・千賀 愛*・山本 理人**

北海道教育大学札幌校障害福祉研究室

*北海道教育大学札幌校特別ニーズ教育学研究室

**北海道教育大学岩見沢校研究室

Practice of Cooperative Education between Linden Special

School and Regular Schools

— A case from Rotenburg in Niedersachsen, Germany —

YASUI Tomoyasu , SENGAI Ai* and YAMAMOTO Rihito**

Department of Social Welfare for Persons with Disabilities, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

*Department of Special Needs Education, Sapporo Campus, Hokkaido University of Education

**Department of Social Physical Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

抄録

ニーダーザクセン州ローテンブルク市にある比較的重度の知的障害、運動障害のある児童生徒を対象にした私立の特別支援学校、リンデン学校の実践について調査を行った。ドイツ・ニーダーザクセン州の教育法では、通常の学校に特別支援学級は設置されておらず、制度面だけを見れば、通常の学校と特別支援学校の2つに分かれた「分離型」の教育システムとなっている。しかしリンデン学校について、特別支援学校と通常学校との連携という視点から見たところ、特別支援学校の分教室を、子どもの居住地域に合わせて複数の通常学校に「共同学級」として設置するなど、制度を弾力的に運用してインクルーシブな教育実践が進められていた。本稿では、リンデン学校の授業の様子とともに、地域の通常学校とのインクルージョンに向けた取り組みについて報告する。

I. はじめに

学校教育法の改訂(2007)により従来の盲・聾・養護学校は、複数の障害に対応する特別支援学校として地域におけるセンター的機能を果たすことが求められるようになった。これにともない特別支援学級とともに通常学級を含めた地域の通常学校への様々な支援が行われるようになってきている。さらに就学規準の弾力化もすすんでいることから、通常の小・中・高等学校において教育を受ける障害のある、あるいは学習に困難を抱えた児童生徒も増えてきている。こうした現状をふまえると、特別支援学校が在籍する児童生徒の教育の充実とともに、近隣の学校への支援を、どのように両立させるのかについての検討が求められる。

限られた人材と予算のなかで児童生徒の教育保障を充実させながら、地域の学校と継続的に連携する一つの方法として、分教室がある。日本では、病弱養護学校(特別支援学校)の分教室を病院や施設に設置する形態が一般的に知られているが、近年、生徒数増加や長年の養護学校空白地域に対する適正配置の必要性の高まりを背景として小・中・高等学校への分教室の設置が行われつつある^{註1)}。こうした傾向をインクルージョンの観点からとらえるならば、同じ敷地・校舎内の分教室は、特別支援学級と同様に通常学級の教師や児童生徒との継続的な交流の機会を提供するだろう。しかし、分教室が設置された学校全体の特別活動や教育課程において、インクルージョン教育が明確な位置づけを得なければ、従来の特殊学級・特別支援学級が行ってきた「交流」の枠組みを変えることは難しい。とりわけ特別支援学校(養護学校)は政令指定都市を除いて都道府県立であり、市町村の教育委員会が管理する小・中学校との連携は、行政組織の壁の問題を解決しながら進めなければならないという課題も含んでいる。

本稿でとりあげるドイツでは、一般の基礎学校や基幹学校等に特別支援学級が設置されていないことから、一般学校と特殊学校の分離・別学の就学形態をとる州が多かったが、ベルリン市州やザールランド州などで統合教育の試みが続いていた(窪島,1998)。一方で統合教育の政策に消極的だった州が従来の「特殊学校」にセンター的機能を付加して通常学校内の専門的な対応を可能にする取り組みが行われている。例えば1990年代にバイエルン州のSchwabenの行政区域では、「巡回型特殊教育サービス(Mobile Sonderpädagogische Dienst: MSD)」が導入され、特別支援学校(Förderschule)の教員が通常学級に在籍する児童生徒を指導する巡回指導・相談が行われるようになった。その後、2000年頃から特別支援学校が「支援センター(Förderzentrum)」として行う授業時間数を一般の通常学校に設置される共同学級(Kooperationsklasse)の時数とすることがバイエルン州教育法の運用上可能になったとされている(Hermann, 2009)。バイエルン州の「共同学級」とは、通常の学級に特殊教育学的な支援を必要とする児童生徒が在籍している状態にあることを指しており、通常学級の教師と特別支援学校の巡回指導教員(MSD)が密接な連携のもとで授業づくりと支援に日常的に取り組んでいくことを意味している。

日本でも特別支援学校からの巡回指導・相談が行われているが、相談・巡回業務は、学校内外の特別支援コーディネーターの仕事であることが多く、地域の通常学校の授業やカリキュラムのレベルまで対応するための十分な時間数が特別支援学校の教員側に確保されていないのが現状である。

さて筆者らはこれまでドイツの障害児教育やインクルージョンの実践に関心を持ち、首都ベルリンの基礎学校の実践(安井・千賀 2007;安井・千賀 2008;安井・千賀・山本 2009)や、ニーダーザクセン州における学校制度や障害児の教育に関する現状について(千賀・安井 2008)報告を

行ってきた。特にニーダーザクセン州の特別支援学校については、その教育制度や教育の現状とともに、比較的軽度の障害のある児童生徒を対象にしたヤーンシュ・コルチャック特別支援学校を例に、移行に向けた取り組みなどについて報告を行ってきた。

本稿では、未検討となっている比較的重度の知的障害、運動障害のある児童生徒を対象にした特別支援学校の取り組みについて、ニーダーザクセン州ローテンブルク市のリンデン特別支援学校(以下リンデン学校)の実践について報告を行う。さらに特別支援学校と通常学校との共同学級の運営などの視点から、インクルーシブ教育の取り組みについて検討する。

なお本稿におけるリンデン学校および共同学級についての調査は、2005年3月から2010年まで計7回(延べ10日間)の訪問を通して行われたものである。

II. ニーダーザクセン州における特別支援学校と統合・共同教育

ニーダーザクセン州では、1972年より各種の障害に対応する特別支援学校(Förderschule)が設置され^{註2)}、1993年の州教育法の改正以降、特別支援学校は在籍児童生徒だけでなく、通常の学校で統合教育を受ける障害のある児童生徒に対しても、指導・授業・相談・各種療法・療育を行うようになった(ニーダーザクセン州文部省 2008)。

ニーダーザクセン州教育法(2007)では、「統合教育(Integration)」として「特殊教育的支援を必要とする生徒は、組織的、人的、物理的条件が可能な限り、このような方法で生徒の個々の支援のニーズが満たされるならば、すべての学校で他の生徒と一緒に教育と授業を受けるべきである」ことが記載されている(第4条)。同州では通常の学校に特別支援学級が設置されておらず、制度面だけを見れば、通常の学校と特別支援学校の2つに分かれた「分離型」の教育システムとなっている。しかし、制度の弾力的運用によって特別支援学校の分教室が通常学級の“共同学級(Kooperationsklassen)”として設置され、授業や学校生活における交流が行われるようになった(Niedersächsisches Kultusministerium:2006)。さらに、2007年に改訂された州教育法によって、従来の特殊学校(Sonderschule)は特別支援学校(Förderschule)として、学習・情緒および社会性の発達・言語・精神発達・運動および身体発達・視覚・聴覚の各種の障害をもつ児童生徒への教育を行うとともに、「特殊教育学的な支援センター(Sonderpädagogisches Förderzentrum)」として他の学校種においても支援を必要とする児童生徒の授業や指導を行うことが明記された(第14条)。またニーダーザクセン州が作成する保護者への総合的な学校案内書がドイツ語と対応した英語・イタリア語・ロシア語・トルコ語・アラビア語版が作成され、ドイツ語を第二言語とする児童生徒に対して集中的な「支援コース」や英語による「支援授業」(Förderunterricht)の実施も行われるようになった(Niedersächsisches Ministerium für Inneres, Sport und Integration 2008, 2009)。

2007年度、ドイツ全体の職業学校(Berufliche Schule)を除く一般学校(Allgemein bildende Schule)の在籍者918万1879人のうち、特殊教育学的支援(Sonderpädagogisch Förderung)を受けている児童生徒は8万4689人(0.9%)、特別支援学校は40万399人(4.4%)となっている。ニーダーザクセン州では、一般学校の96万9069人のうち統合教育を受けている児童生徒が2513人(0.3%)、特別支援学校の在籍者が2万768人(3.9%)であり、首都ベルリン市州の一般学校における統合教育の児童生徒の割合2.1%(特別支援学校は3.8%)と比較すると分離形態の傾向が強いといえる(Sekretariat der Kultusministerkonferenz:2009, IVD/Statistik:2009a&2009b)。

しかし教育統計の結果を参照しても、ニーダーザクセン州の一般学校におけるは学校種別の数字が明らかでなく、特別支援学校が行っている巡回指導や分教室による統合教育の実態や教育実践については不明な点が多い。

Ⅲ. リンデン学校について

1. 沿革

リンデン学校(Lindenschule)は、ドイツ北西部のニーダーザクセン州にある人口約2万2千人の都市ローテンブルク市(Rotenburg; Wümme)にある特別支援学校(Fröderschule)で、障害者の病院、生活施設などを運営するキリスト教系の宗教法人「Rotenburger Werke」により運営されている。したがって制度区分上では私立学校(Privatschule)の位置づけになるが^{註3)}、後述するように予算の大部分が公的予算を占めており、また Thamm 校長によれば、その性格として「運営に関して州や郡の直接的な傘下でない」と言う点が強調されていた。リンデン学校は、その前身として地域の障害児の親の会により1908年にてんかん、知的障害児の子どものための教育施設として学級が開設されたのが始まりである。1975年に知的障害児のための特殊学校(Sonderschule)として認可、リンデン学校の名称になり、1987年、校舎の新築がなされて現在の場所に移転、今に至っている。なおこの移転に際し、現校長の Eberhard Thamm 氏が、教頭として公募により採用され、2年の準備期間を経て1987年から校長を務めている(Rotenburger Werke 2009)。

2. 組織と運営

2008年現在の学校規模は、児童生徒数186名(男子120名、女子66名)で、そのうち学校寮(福祉法人 Rotenburger Werke が運営する福祉施設)利用者66名、児童生徒の年齢は6~20歳である。職員75名のうち37人が教員である^{註4)}。教員は特別支援教育の資格を持つもので、その他、運動療法、言語療法などのセラピスト、教育的補助教員(Pädagogischen Mitarbeiter)などで構成されている。リンデン学校の設置は、上述の通り私立の宗教法人によるものであるが、職員給与や暖房費、施設の各種維持費、事務費については、その75-80%がニーダーザクセン州の予算から支出されており、残りの20-25%は、各自治体(Region)から支出されている。このように通常の運営経費については、公的な予算により賄われている。その他の企画などに関しては、運営している法人への寄付金などからも支出されているが、基本的に本人及び保護者の費用負担は無い。なお2008年度に申請した予算は38,000,000ユーロとのことであった。つまりリンデン学校は、私立ではあるものの、特別な教育的ニーズをもつ子どもの公教育が無償で提供されているのである。

またリンデン学校では、初等段階(Premiere)の4学年、中等段階(Sekundar)の5学年、修了段階(後期中等段階: Abschluss)の3学年というニーダーザクセン州の通常教育に対応した年齢段階での学部分けが行われている^{註2)}。

3. 地域の通常学校との連携

リンデン学校の理念は「障害児と非障害児の共生」である。Thamm 校長によれば、「子どもの精神的成長の個人差が大きく、とくに思春期には教員から子どもが学ぶことよりも、児童生徒同士の方が成長への影響が大きい。」との考えから、「近隣にある複数の通常学校に特別支援学校の分

教室として共同学級(Kooperationsklassen)を設置し、通常学校の児童生徒との交流を積極的に進めている。」とのことであった。校長は、先にとりあげたバイエルン州の共同学級の取り組みに影響を受け、近隣では前例のなかった通常学校における分教室設置を実現させるため、州や自治体の担当部署や教育委員会と何度も折衝を重ねたという。

2003年に始められたこの取り組みは、2008年現在、6-10歳の基礎学校段階で5学級中2学級が共同学級での授業を行うに至っている。また中等段階では、9学級中1学級(8人)が、Bothel基幹学校(Hauptschule)で、最終の3学年を含む修了段階では、ローテンブルクの職業学校(Berufsschule)3学級で、共同学級を設置している。ただし共同学級の生徒は、基幹学校の「卒業資格(Abschluss)がなかなか取れず、おおよそ80名ほどが修了段階にとどまっている」などの課題もある。

そのほか私立のモンテッソーリ学校^{註5)}の児童40人ほどが、週に2回の頻度でリンデン学校を訪問し、スポーツ等の授業を行っている。

4. 日課・カリキュラム

ここでは本研究で調査した中等及び修了段階の概要を述べる。表1は、中等段階の時間割の例、表2は、修了段階の時間割の例である。授業は毎日8:00から始まり、月曜日から木曜日は昼食などを挟んで14:40まで、金曜日は12:00(12:30)まで行われる。ドイツ語や数学のほか、スポーツ、一般社会、芸術、音楽などの教科が編成されている。

時間割には休み時間の設定も多いが、暗室にミラーボールが光り音楽に合わせて自由に踊る「ディスコ休憩」のほかに、楽しく体を動かす運動やゲームに参加できる「スポーツ休憩(Sport Pause)」など、余暇支援につながる休憩時間の設定も実施されている。この時間には体育館でゲーム、ボクシング、サッカー、外での日光浴などをしてもよい。Thamm校長によれば「このような体制にしてから、子どもの衝動性や攻撃性が明らかに減った」とのことであった。各場面では教師がついているが、「訓練ではないので、自由に楽しむこと(あくまで授業ではなく休み時間)」という以外に決まりはなく、子どもは活動への参加については、自己選択できるよう配慮されている。余暇活動などの場面を通して発達の段階に合わせた自己決定の機会を保障することにもつながっている。

中等段階の選択授業は、1グループあたり8人から10人の編成で行われ、共同作業学習(Arbeits Gemeinschaft)、自然造形(Gestalten mit Natur)、感覚統合療法(Sensorische Integration:これは肢体不自由の子どものみ)などが行われている。

また指導にあたっては、サイン言語なども活用しコミュニケーション能力の向上と自己決定のための自発的に外界からの情報を求める姿勢を学ぶことが配慮される。図3は表2の時間割を示したもので、校内の様々な場所に、文字だけではなく図や写真などを使った掲示が行われており、発達段階に合わせて子ども自身が情報を得られるよう工夫されている。また図4は、ボタンを押すとその日のカフェテリアのメニューが音声で流れるもので、このようにVOCA(Voice Output Communication Aid)などの音声装置を用いた情報提示も行われている。

卒業間際の修了段階(後期中等段階)では、時間割がより細分化され、さらに基礎的な教科学習に加えて実社会での生活に向けたより実用的な科目が設定されている。なかでも選択授業は、卒業後の進路にあわせて木工(Werken: Holz)、織物(Textile)、コンピューター(Computer)、金属加工(Metal)の4コースに分かれ、週一回、半日があてられ1年間継続して行われている。

IV. リンデン特別支援学校の授業・教育実践

1. 数学授業

修了段階の1年目(14-15歳)を対象にした数学の様子である。対象生徒は8名で、担当教師(担任)は、特殊教育学、数学などの教員資格を有している(ハンブルグ大学にて取得)Ranihaus, Andreasである。その他、補助教員(Pädagogisch Mitarbeiter)の Liedtke Elke と Kanig Ins が指導にあたっており、計3人が連携して授業が進められた。

この学級は、現在のクラス編成になってから半年が経過しており、8人のうち、6人は2年半同じ集団で過ごしてきた。新学期から新しく入ってきた2人のうち一名は、比較的軽度の障害児を対象としたヤースシュ・コルチャック特別支援学校からの転校生である。

この日の学習単元は図形で、四角形、三角形、多角形などについて、学習プリントや実際の操作を通して学ぶ内容であった。最初の20分間は全体指導の形で進められ、大きな青い紙の上に竹串の棒を使って三角形と五角形をつくり、辺の数と角の数を確認した。

その後、椅子を動かして個々の課題に移り、プリントを利用して自分で切った三角形の色紙を貼り付けるという課題に取り組んだ。途中、理解が遅い生徒には、教師が個別に声をかけるとともに、難しい作業の一部を手伝うとともに、各自の取り組みの様子などを見ながら褒めるなど、活動への集中力を維持するための支援が行われた。また竹ひごが見やすいよう、ブルーシートの上で操作させるなどの生徒の特性に応じた対応もみられた。

個別の活動の後半には教師が「がんばっているわね」と声をかけると、女子生徒が「私だけじゃない、他の子もよ!」と応える、個別の課題に取り組みながらも他の級友の取り組む姿を意識した発言がみられた。授業の最後には、生徒らが作成した複数の三角形を数えるなど、再び全体指導に移って学習内容のまとめが行われた。

2. インクルーシブなスポーツ授業^{註5)}

ここで紹介する近隣のモンテッソーリ学校^{註6)}との交流授業は、2004年から開始されている。スポーツ授業を通じた交流は、障害のある子どもたちへの理解につながると同時にモンテッソーリ学校には体育館がないため、施設を利用する上でもメリットがあるとのことであった。

参加児童はリンデン学校から初等段階8人、モンテッソーリ学校から36人(5-10歳)であった。ちなみにモンテッソーリ学校の児童は、各学年10名で40人の学校である。指導にあたった教員はリンデン学校から2人、モンテッソーリ学校から1名(通常は2名だが体調不良で代わりに児童の父親1名が補助に入っている)兵役免除支援者^{註7)}1名(20歳)である。またリンデン学校の教員は「スポーツ」を専門にしている Peter Schlake(46歳)と2007年に採用された Brita Diekmann(31歳)氏である。

授業中では、モンテッソーリ学校の児童がリンデン学校の生徒に自分から話しかける場面が見られるなど、自然な形で交流が進められていた。モンテッソーリ学校の教員によれば、「障害のある子どもと一緒に”何か”をすることで、接し方を知る機会になる」「最初は障害のある子どもを恐がる子どもが多いが、一緒に活動することで、そのような気持ちが無くなっていく」「学年があがると接し方も変わり上手になってくる」などの感想を持っているとのことであった。

一方リンデン学校の教師 Schlake 氏によれば「リンデン学校以外の子どもに対する恐怖感が無くなり、社会的な関わり方を相互に学ぶことができる。リンデン学校の子どものためには、健常の子

どもが行動のモデルになる。そのため通常の特別支援学校内の学習では、少数の教師をモデルにしている子どもが、35人を見本とすることで、より身近な目標を見つけることができる。ただパートナーを見つけようとするときに、自発的にリンデン学校の子どもと組もうとするところまでは行かないので、こちらが振り分ける様になっている段階である。」とのことであった。また「一緒にやっているとリンデンの子どもたちにも“競う”という意識が生まれてくる。日頃、教師のかけ声では、自分から動かない子どもたちが、健常児の動きにつられて集まってくるなど、子ども同士での学びあいがあることが大きい。」と感じているとのことであった。

このようなインクルーシブなスポーツ授業は週に1回の頻度で行われており、行事に限定した単発の交流とは異なり、子ども間の関係維持や教師間の連携による共同の実践として継続的に取り組まれていることは特筆すべきことである。

ただし、基礎学校段階を終えて、中期教育段階以後(5年生以降)のスポーツ授業では、競技的な要素が多くなることからインクルーシブなスポーツ授業の実施は難しくなり、現在のところ実施はしていないとのことである。

V. 地域支援とセンター的機能

1. リンデン特別支援学校と基礎学校(Grundschule)との共同学級の運営

リンデン学校の分教室として、ローテンブルク市内の郊外にある基礎学校2校に各1学級、ヘムスリンゲン基礎学校(Hemslingen Grundschule)に1クラス、修了段階の最終学年では3つの職業学校・職業準備コースに3クラスの共同学級(Kooperationsklassen)を設置している。

共同学級が設置されている通常学校には、各種の専門的な療法を行うための設備や教室がないため、障害の状況に合わせて週に1-2回は、リンデン学校に戻って授業を行っている。このような州法の弾力的運用による分教室としての共同学級の方式は、学校によっては教室不足や方針の違いにより設置を断られることもある。リンデン学校では、毎年10-11月になると次年度の入学者を把握し、新たに共同学級を設置する場合には生徒の居住地近くの基礎学校への交渉を開始する。リンデン学校に入学した児童を、各学校へ振り分ける際、もっとも重視されるのは「共同学級のほかの児童と年齢が近いこと、居住地が基礎学校に近いこと」の2点であり、これらは障害の程度や種類よりも優先されている。

共同学級のシステムとして、1年生段階では、共同学級の準備期間としての子ども同士の関係づくり、教師との関係づくり、基本的な生活習慣、実態把握を行うことが重視される。2年生から4年生段階では、原則として月一木曜日に共同学級で授業を行い、金曜日には、リンデン学校に戻って言語療法、心理-運動療法、温水プールの水治療法等の授業を受ける。自宅・学校間の移動は、社会保障制度として、18歳までの移送に関する公的サービスを活用し、福祉タクシーを利用している。

通常学校に共同学級を設置する際、校舎のバリアフリー化に伴う改装工事等の経費が必要になった場合は、ローテンブルク市と基礎学校の学区が全額を立替えた後、リンデン学校の予算から毎月の学級スペースの賃料として10年かけて返済するという形をとっている。また光熱費、暖房費、消耗品等の経費は、実費を計算してリンデン学校から共同学級を設置している通常学校に支払っている。このような運営形態は、学校が直接管理する予算と権限が、ドイツに比べて極端に少ない日本の学校とは大きく異なる部分であろう。

2. ヘムスリンゲン基礎学校

共同学級が設置されたヘムスリンゲン基礎学校は、リンデン学校のあるローテンブルク市内から西に10キロほどのヘムスリンゲン村(Hemslingen)にある唯一の基礎学校である。共同学級の運営については、2003年から行われている^{註8)}。児童数83名(2005年9月現在)、1年生は2学級、2-4年生は1学級ずつから構成され分教室の共同学級と合わせ計6学級という小規模校である。教員数は、フルタイム(28時間)が1名、子育て等の減数労働時間(16時間又は14時間)が8名の計9名である。授業は朝7:45から始まり、月曜日から金曜日まで1日5コマの授業が行われ、昼食は摂らずに12:45には帰宅となる。ただしリンデン学校の児童は、午後からリンデン学校へ移動し、学校で昼食を摂ってから下校となる。

リンデン学校のThamm校長によれば、「ヘムスリンゲン基礎学校のような小規模校は、子ども全員の名前を教師が覚え、自分の学級でなくとも子どもを知ることができるため、インクルージョン教育を進めやすい」とのことであった。これは発達に遅れのある児童にとっても同様であり、インクルーシブな小規模校では自分を理解してくれる教師や仲間の存在を身近に感じることができる。

共同学級は、8-10歳の3-4年生8名(男子4名、女子4名)から成り、特殊教育の教員資格を有する担任教師Krey氏と児童はリンデン学校に籍を置いており、分教室という形態である。その他、共同学級には保育士の資格を持つ補助教師1名と、兵役免除による補助者1名が補助に入っている。

ヘムスリンゲン基礎学校のカリキュラムでは、学校のコンセプトに合わせた促進授業(週2時間)を設置して選択授業を行っている。1-2年生は、教師が振り分けを行い、認知・運動療法・集中力訓練・技能の3学級を4クラスにわかれ、計2学級の3-4年生は図工などの4科目から興味に応じて自主的に選択して4つの集団にわかれて促進授業が行われる。なおスポーツ、音楽、一般社会(社会生活技能)などで、通常学級と共同授業のインクルージョン授業を行っている。また休み時間などを通して、日常的な交流も図られており、インクルーシブ校として実践を重ねている。

3. 逆統合型の音楽授業

この授業に参加したのは、共同学級の児童8名と、通常学級3年生の児童15人で、共同学級の朝の会などが終わった後に、通常学級の児童が訪れる形で行われ、いわゆる逆統合型の共同授業であった。授業は、主にリンデン学校の教員により進められ、ギター伴奏を通常学級の教師が受け持つなど、相互の教員の役割分担が図られている。

教師と児童が教室の床に輪になって座ったところで授業が始まった。事前に用意された木の絵、雨の色テープ、鳥の置物、魚の人形、花、赤ちゃんの人形などについて「木をやってくれる人」などの問いかけで、担当の子どもが割り振られた。割り振りにあたっては、共同学級、通常学級それぞれの児童が、バランス良く担当できるよう配慮されていた。「私たちは天から世界をもらいました。太陽そして雨」という歌を、ギター伴奏に合わせて合唱しながら、「雨(色テープ)を持った子ども」が、雨を表現しながら振り付けを行い、輪の中心に置いていった。

このように、共同学級、通常学級それぞれの子ども、「一人一人が主人公として活躍する」場面が設定され、自然に他者への尊重が促されるような内容である。

次はドイツの子どもに人気のあるお菓子“グミ”をテーマにした「クマのグミ」の歌で、軽快なリズムとユーモラスな歌詞に合わせて全員で体を動かしながらの合唱が行われた。共同学級の児童

で歌を上手に歌えない子どもも、体を揺らしながらそれぞれのやり方で楽しむ様子が見られた。最後は体の各部分をきれいにするという内容の歌で、これも歌詞に合わせて体を動かしながら、楽しく身体部位を学習することにつながるという内容であった。

4. インクルーシブなスポーツ授業

参加児童は通常学級の1年生15名と共同学級の児童5名の計20名である。なお授業の記録は2006年9月に行った。授業を担当したのは Burkhard Otten 氏(当時36歳)で、ヘムスリンゲン基礎学校では1、2、3年生の体育(4クラス)を担当している。また週に1度、運動が必要と考えられる児童に対し、体育の補助授業も行っている。Otten氏は2000年(6年前)からこの学校で教えており、教員資格は、基礎学校、スポーツ、宗教、ドイツ語を取得している。

訪問時の授業(表6)では、最初の10分程度は「火」・「水」・「風」・「雷」などの合図に合わせて体育館の中でポーズをとるゲームを行い、その後に身近な動物になって教師の合図とともに緩急をつけながら体育館を動き回る活動が行われた。このウォーミングアップを行った後、警察と泥棒がルールに沿って追いかけたり「刑務所」に逃げ込んだりする「警察ごっこ」のゲームが行われた。全体として待ち時間はほとんどなく、活動内容の説明以外は児童が活発に動いていた。入学して約1カ月という1年生の導入段階の授業であることから、遊び的な要素の強い内容である。

担当の教師がインクルーシブなスポーツの授業で気をつけているのは、「全体に対して繰り返し(ルールなどを)示すようにして」おり、「例えばサイコロの数や動作を示したり、子どもがルールを理解していない時には補助をしたりする。障害が多少重くても、だいたい活動は一緒にできるだろうと思う。全部はできなくても、一緒にやる、動くことが大切であると考えている。」とのことであった。



図1 リンデン学校のエントランス



図2 リンデン学校 Thamm 校長

表1 中等段階における時間割の例（2006-2007）

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-------------|-----------------------------|-------------|----------------|---------------|---------------|
| 8:00-9:00 | 朝の集い・ 数学 | 朝の集い・ 数学 | 朝の集い・ スポーツ註 | 朝の集い・ 朝食準備 | 朝の集い・ 朝食準備 |
| 9:00-9:30 | 休憩 | 休憩 | 休憩 | スポーツ | 休憩 |
| 9:30-10:30 | 朝の軽食/ 介助 | 朝の軽食/ 介助 | 朝の軽食/ 介助 | 朝の軽食/ 介助 | 朝の軽食/ 介助 |
| 10:30-11:00 | 自由遊び | 自由遊び | 自由遊び | 自由遊び | 自由遊び |
| 11:00-12:00 | 一般社会 | 芸術 | 買い物授業 | ドイツ語 | 音楽/ 歌の集い |
| 12:00-13:30 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | | |
| 13:30-14:40 | 探索 (Umwelterkundung) | 探索 | 知覚と運動育 成 | | |

表2 修了段階における時間割の例（2006/2007）

| | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-------------|---------|--------------|---------|----------------|---------|
| 8:00-8:30 | 朝の集い | 朝の集い | 遊び/音楽 | 朝の集い | リズム/音楽 |
| 8:30-9:15 | 読みコース | テーマ学習 | 読み | テーマ学習 | ドイツ語/宗教 |
| 9:15-9:30 | テーブルカバー | テーブルカバー | テーブルカバー | テーブルカバー | テーブルカバー |
| 9:30-10:00 | 休憩 | 休憩 | 休憩 | 休憩 | 休憩 |
| 10:00-10:45 | 朝の軽食 | 朝の軽食 | 朝の軽食 | 朝の軽食 | 朝の軽食 |
| 10:45-11:30 | 作業 | スポーツ | 調理 | 休憩 | 彫塑 |
| 11:30-11:45 | 休憩 | スポーツ | 休憩 | 休憩 | 絵画 |
| 11:45-12:30 | 作業 | スポーツ | 調理 | 数学 | 造形 |
| 12:30-13:30 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | |
| 13:30-14:40 | 共同作業 | 自由課題・ 買い物 | 自由課題 | 社会活動 トレーニング | |



図3 図で示された時間割



図4 昼食メニューが流れる音声装置



図5 リンデン学校平面図

校舎はバリアフリーの配慮した平屋建てで、通常の教室のほか各種の「療法」室が設置されている。

表3 リンデン学校における数学の授業（修了段階1年目）

8:30 課題の説明と内容確認

T:「今日は何をやるでしょうか？」①
 C:「四角形？」
 T:「三角形を作ります」（青地の紙に長い竹串の棒を置く）
 C:（女の子が三角形をつくる）②
 T:「だれか正方形を作ることができますか？」
 C1:（2-3人が前に出てきて長方形を作る）
 T:「6本で三角形をつくれますか？」
 C2:（三角形を崩している）

①
 T:「これは三角形？」
 C3:「何か簡単なの！」
 T:「簡単なのがやりたい？」
 C4 3本で三角形を作る
 T:「すごい！」「〇〇さん、五角形を作ってみて」
 C5「えー、五角形？そんなの見たことないよ」
 C:「五角形は何本使うかな」
 C:「五角形だ！」
 T:「いくつの角がある？」

②
 C:「角はどこにあるの」
 C:「五角形だけど、家みたいだね。」
 T:「この中に、三角形ある？1本だけ動かしてみて」
 C: 竹串を動かす
 T:「これは何。三角形、それとも五角形かな」

8:50 個別の活動

それぞれ椅子を動かして机に移動して、プリントの課題に取り組む。

教師は個々の作業を見て回っている。③

プリント課題「この図形の中に三角形がいくつ入っていますか？」

T:「いくつ角がある？」

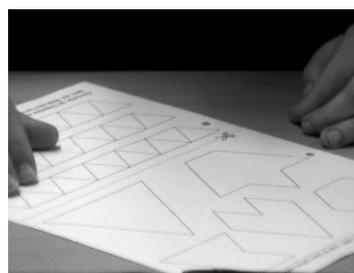
③
 C:「6つ」
 T:「下の三角形を使うのよ。用意したからね。自分で確かめてみて」
 C:「なんで緑色なの？」
 T:「分かりやすいと思って」
 C: 隣にはいつも補助教員がついている。
 緑の三角形もすではさみで切ったものを使っている。
 課題は必要な部分以外は白い紙で隠している。④

ST:「角と角をそろえるのよ」
 T:「Nさん今日は特によくがんばっているわね」
 C「Aさんだけじゃない。みんなも（がんばっている）」

④
 T:「Nさん、あなたもよくやっているわね」
 C:「あたしだけじゃない。他の子もよ。」

9:17 まとめ

T:「最初の図では三角形がいくつありますか？」⑤
 C:「6個」
 T:「6個ある」（正解）
 C:「個」
 T:「4つ目は？」
 C:「9つ」
 T:「最後の図は、良くできました。」



T:教師、ST:教育的支援者、C:子ども

記録 2006/9/13

表4 リンデン学校でのインクルーシブなスポーツ授業

10:40-10:50 自由遊び

ウォームアップをかねている。
遊具を出し自由に使って遊ぶ、準備が遅い子どもも
自然に合流する様子が見られる①



10:50 グループ活動

青・緑、赤、紫、無し：たすきを渡し4チームを作り各コーナーへ
同じチームの子どもがパス：他のチームの子どもがそれを取る ②
次はボール2個で行う

①



11:05 活動の振り返り

T：「やっていて問題はなかった？ちゃんと見て」
C：「たいたりするのダメじゃない」
「ボールを転がすと危ない」「ボールを抱え込んじゃダメだ」
「手に持っている人からの横取りはダメ、持ったまま走り回らないで」
「3歩までにパスをするんだよ」などの意見が次々に出る

②

T：「パスしてもらいようにアピールすることも必要ですね。」
「もう一度やってみよう」
リンデンの教員が、活動の輪に入らない子どもなどを個別に支援する



11:15 再開 次のゲーム

「後ろ向きでボールを壁にぶつける」などの指示が書かれた10枚の
カードが体育館の4面の壁に貼ってある③

③

4人ずつ一組になって、各カードのところに移動し、指示の通りに
動いたら各自の持つ用紙にチェックしていく。
10カ所に張られた運動課題をこなしていく。④



11:25 まとめ

T：何が難しかった？
C：「めちゃくちゃ（リンデンの子は全然できない）かと思ったけれど、
紙をもらったら、ちゃんとチェックしてあったので驚いた」

④

T：「またやりたいと思う人は？」
C：9人が手を挙げる

T:教師、C:子ども

記録 2008/11/3

表5 共同学級における逆統合型の音楽の授業

8:45

<感謝の歌>

輪になって歌の準備（役割分担）

T: 木の絵、雨の色テープ、鳥の置物、魚の人形、花、
赤ちゃんの人形などを用意し

「木をやってくれる人」

「鳥をやってくれる人」など、それぞれの担当者を決めて配る。①



8:57

①

T: 「私たちは天から世界をもらいました。太陽そして雨」

C: (ギターに合わせて合唱)

雨（色テープ）を持った子どもが雨を表現するなど、それぞれ
振り付けを行う。

T: 「私たちは天から世界をもらいました。鳥そして魚。そのことに
感謝します」（その都度、真ん中に教材を集める。）②



②

9:01

一通り歌い終わり、それぞれの教材を交換し再度全体で歌う

9:05<クマのグミのうた>

T/C: 「食べ過ぎちゃいけないよ。」

「小さな袋をすぐに食べちゃうんだ」

「これがクマのグミだよ」

「歯にはさまったりしてね」（ユーモアのある歌詞・合唱）

グミのリズム③



9:10 <からだをきれいに>

T/C: 「体を洗ったり、歯を磨いたり」（振り付けのある歌。）

「体もきれいになったし、歯もぴかぴかだ」（合唱）

③

9:15 終了

T:教師、C:子ども

記録 2005/9/13

表6 インクルーシブなスポーツ授業

10:10 ウォームアップ

T:「みんなが知っている遊びだよ。火の時はドアに行く、水はベンチの上へ逃げる。ドアはどこにある？」
 C: (走って行って)「ここ！」
 T:「水はベンチのところ。」「嵐のときは、床に寝ます」(動作でも見せる)
 「雷のときは、動きを止めます。」①
 T: (動物のマガジンを見せる)「お腹にポケットをもった動物は何か？」
 C:「カンガルー」
 (教師と子どもがカンガルーの動作をまねて体育館内を歩き回る)



①

T:「水がたくさん来たよ。はやく。」
 C: (慌ててドアのところへ走る)
 (迷っているリンデンクラスの子どもを体育教師が補助)
 T:「次はぞうゾウさんになって。」
 C: (腕を鼻に見立てて揺らしながら、歩き回る)
 T: (笛を吹く)「火が出た!」「次はコウノトリ」など課題を出す②



10:19

T:「ヒョウになってみて。はやくはやく。」(笛を吹く)大きな嵐だ!
 C: 床に寝る。

②

T:「あつい、赤い火」「次はもう1回、さるだぞ。」

10:21 警察ごっこ

T:「輪になって集まってください」
 C: (子どもたちがざわついている)
 T:「シー!シー!」手で“狐”の形を作る。
 「これは何の合図だったかな？」
 C:「静かに。」
 T:「そうだね」
 C:「今のもう一回やりたいな」
 T:「次は警察ごっこをします。牢屋をつくります。」
 (手伝う子を指定)



③

10:26

T:赤いサイコロを出してくる。③
 「泥棒は警察から逃げ、つかまると刑務所に行きます。」
 「牢屋でサイコロを振って、1・2・6が出たら逃げてても良いことにします。」(もう一度)「どの数なら外に出ていいのかな？」
 C:「1と2と6」
 T:「警察は私とKと、あと二人です。やりたい人は？」
 C: (子どもたちが競って手を上げ騒ぐ、2人を指名して計4名が警察に
 犯人は牢屋から離れた壁に並びゲーム開始)



2回目の「警察ごっこ」④

④

ヨシ (リンデン学級の児童) はゲームが終わっても牢屋から出てこない。
 T:「ヨシは刑務所から出てこないの、監視人になってもらいましょう」
 (3回目のゲーム)

10:35 まとめ

再び輪になって集まる。
 T:「たくさん犯人がいたね。でも1人捕まらなかった人がいました。」
 「サイコロは何の数なら外に出てよかったのかな？」
 C:「忘れた」



T:「何の数だっけ」⑤

C:「1. 2. 6」

T:「よく覚えていたね。みんなよく走ったから時間が過ぎるのは早いね」

⑤

終了

T:教師、C:子ども

記録 2006/9/12

VI. まとめ

本稿では、ドイツ・ニーダーザクセン州における比較的重度の知的障害、運動障害のある児童生徒を対象にした特別支援学校の取り組みとして、ローテンブルク市のリンデン特別支援学校(リンデン学校)の実践を報告した。さらに特別支援学校の分教室として通常学校に設置された共同学級の運営などについて紹介した。

ドイツ・ニーダーザクセン州では、分離型の教育システムを基本としつつも、統合教育、共同教育などの多様な形態による特別支援教育が展開されるようになってきている。特にリンデン学校は、特別支援学校のもつ設備や教員組織の専門性を生かした個々の子どもへの教育的支援を基盤にしなが、近隣の通常学校の子どもの合同授業や地域の通常学校へ分教室の設置をするなどの取り組みを行っていた。またモンテッソーリ学校の健常児が特別支援学校で学んだり、通常学級の子どもが共同学級で学んだりといった、自由な発想の取り組みが行われていた。これらは実質的なインクルージョンを達成すると同時に、従来から通常の学校では対応が難しいとされていた中・重度の知的障害や運動障害などの「高度な教育的ニーズ」にも対応するものであった。

近年のインクルージョン教育の推進に伴い、規模が縮小される傾向にあるドイツの特別支援学校ではあるが、リンデン学校は、州や地方自治体の予算措置を受けつつも学校独自の権限を確保し、「どこにも属さない」という性格の私立の学校として運営が行われていた。このような私立の学校運営に関し、遠藤(2004)は、ドイツにおいて特に私立学校が取り組んできた「管理された学校」から「自由な学校」への転換について言及し、学校独自の創意工夫に基づいた「良い学校」への変化の模索の流れのなかで、「1990年以降個々の学校の自律性が保障され、多用な取り組みが行われるようになってきた」ことを指摘している。今回取り上げたリンデン学校も、分教室による共同教育の試みが、当初、校長自身の出身地域の学校から始められるなど、校長の教育的理念を反映させながら、独自の取り組みを進めてきていた。1987年から20年以上にわたって校長を務める Thamm 氏の功績も大きい。日本のように2-3年で交代する管理職とは異なり、ドイツでは公立・私立を問わず管理職や学校教員の移動はごく限られた範囲であり、地域の学校との連携やセンター的機能の維持にとって重要な役割を果たしていると考えられる。

以上のようにリンデン学校は、従来の特別支援学校としての機能を維持しながら、近隣地域の学校の支援センターとしての機能や障害の重い子どもの居住地域におけるインクルージョンを実現しており、それぞれの地域や学校の状況に合わせた多様なインクルージョンのあり方があることを示すものと言えよう。

これらの取り組みは、地域のセンター的機能や通常学校との積極的な交流が求められるようになった日本の特別支援学校の教育においても参考となるものと思われるが、そのためには頻繁な人事異動や学校権限の拡大も見直すことが必要ではないだろうか。さらに特別支援学校の分教室による共同教育の取り組みは、日本で孤立しがちな通常学校における特別支援学級のあり方

や、通常学校における障害の重い子どもの教育的ニーズへの対応についても、一石を投じるものとなるのではないだろうか。

付記

調査資料の収集にあたっては、日本学術振興会科学研究費補助金「障害児者の余暇・自立支援に関する地域システムの構築:ドイツの教育・福祉から」(基盤研究 B、課題番号 20402042、研究代表;安井友康)の補助を受けた。

謝辞

調査にご協力頂いたリンデン特別支援学校の Eberhard Thamm 校長、Peter Schlake 先生、ヘムスリンゲン基礎学校の Burkhard Otten 先生、その他ご協力頂いた先生方をはじめ、石光祐子さん、宍倉妙子さんに感謝致します。

註

- 1) 静岡県の伊東市立西小学校に東部養護学校の小・中学部の分教室が設置（平成 11 年度）長崎県の離島にある五島商業高等学校に本島の鶴南養護学校の分教室が設置され（平成 17 年度）、島根県の出雲養護学校が太田市に分教室が設置された（平成 17 年：太田私立第二中学校内、平成 21 年島根県立瀬摩高等学校内）。これらはこれまで養護学校が設置されていなかった地域への適正配置の一環として分教室の方式が取り入れられた例である。また養護学校の児童生徒数が増加して大規模化に直面している神奈川県では平成 16 年から県立高等学校を中心に分教室が相次いで開設され、平成 21 年 4 月現在では 11 の高校に分教室が設置されている。
- 2) ニーダーザクセン州における教育システムについては、千賀・安井（2008）を参照のこと。
- 3) 2009 年現在、ニーダーザクセン州には、このような私立（Privat）の特別支援学校（Förderschule）が 49 校登録されており、そのうちリンデン学校のような学校寄宿舎が設置されているのは 29 校となっている。
<http://www.privatschulberatung.de/Deutschland/Niedersachsen/Sonderschule-Foerderschule.html>
なお公立を含めたニーダーザクセン州全体の特別支援学校（Förderschule）数は、337 校(2006-2007 年度)である。Statistisches Bundesamt(2008) Statistisches Jahrbuch 2008Für die Bundesrepublik Deutschland.
- 4) 2010 年現在の職員は、州政府の職員として州から直接給与を受けているのが、校長を含め 2.7 人分（Stelle）、その他、学校に所属する教員 32 人分、教育的支援者（Pädagogismitarbeiter）28 人分、セラピスト 2.9 人分、教員試験 2 次合格以前のもの 4 名などである(2010 年 9 月の校長への聞き取りから)。
- 5) 授業科目「Sport」については、日本の「体育」にあたるが、ドイツではより幅の広い概念としてとらえられることから、そのまま「スポーツ」とした。詳細については、「安井友康・千賀愛・山本理人(2009) ドイツ・ベルリン市州のインクルーシブ・スポーツ授業－フレーミング基礎学校の取り組みから－」を参照のこと。
- 6) リンデン学校から 3km ほど西に位置するモンテッソーリ教育を実践する私立の基礎学校
- 7) 徴兵に伴う兵役義務にかわり、社会奉仕活動（Zivildienst）として福祉活動などに従事している。
- 8) リンデン学校の Thamm 校長が、この村の出身と言うこともあって進められた要素も強いとのことで、分教室などの新たな教育的試みが、校長などの人脈を使って始まっている点は興味深い。

文献・資料

- 遠藤孝夫(2004) 管理から自立へー戦後ドイツの学校改革ー、勁草書房。
- Erlass zur Förderung von Schülern mit besonderen Schwierigkeiten im Lesen, Rechtsschreiben oder Rechnen.
RdErl.D.MK vom 04.10.2005 -26- 81631 VORIS 22410.
- Hermann, Reinhilde (2009) Kooperationsklassen- ein Beitrag zur sonderpädagogischen Grundversorgung an
allgemeinen Schulen? , *Inklusive Schule*, Pius Thoma & Cornelia Rehle, KLINKHARDT, 257-261.
- Horst Schaub & Karl G. Zenke (2007) Wörterbuch Pädagogik, Deutscher Taschenbuch Verlag.
- 窪島務 (1998) ドイツにおける障害児の統合教育の展開、文理閣。
- Kulturministerkonferenz:KMK(2007)
<http://www.kmk.org/statistik/schule/statistiken/sonderpaedagogische-foerderung-in-schulen.html>
- 森川洋 (2005) ドイツ市町村の地域改革と現状、古今書院。
- 長野県教育委員会(2008) 『特別支援教育地域化推進事業 養護学校高等部 更級分教室の教育実践報告』
2008
- 長崎県教育委員会 (2004) 障害のある子どもの教育推進計画：実施計画
http://www.pref.nagasaki.jp/t_shien/plaza/pdf/jissikeikaku.pdf
- ニーダーザクセン州政府公式 web サイト：<http://www.international.niedersachsen.de/jp/home.html>
- ニーダーザクセン州文部省公式 web サイト：http://www.mk.niedersachsen.de/master/C580_L20_D0.html
- Niedersächsisches Kultusministerium(2006) Sonderpädagogische Förderung Informationen für
Eltern Niedersachsen Sonderpädagogische Förderung.
- Niedersächsisches Ministerium für Inneres, Sport und Integration (2008) Das niedersächsische Schulbildungssystem,
Deutsch/Arabisch./ Deutsch/Italienisch Deutsch/Russisch Deutsch/Türkisch .
- Niedersächsisches Ministerium für Inneres, Sport und Integration (2009) Das niedersächsische Schulbildungssystem,
Deutsch/Arabisch..
- Niedersächsisches Schulgesetz(NSchG) (2007) Niedersächsisches Kultusministerium.
- Niedersächsisches Kultusministerium (2006) Unser Schulwesen in Niedersachsen - auf einen Blick.
- Rotenburger Werke(2009) 100Jahre Lindenschule, Rotenburger Werke.
- Sekretariat der Kultusministerkonferenz (2009) Schüler, Klassen, Lehrer und Absolventen Schulen 1998-2007 ,
Dokumentation Nr. 188.
- Sekretariat der Ständigen Konferenz der Kultusminister der Länder in der Bundesrepublik Deutschland
IVD/Statistik(2009a) Sonderpädagogische Förderung in Förderschulen (Sonderschulen) 2007/2008. Bonn, den
21.01.2009.
- Sekretariat der Ständigen Konferenz der Kultusminister der Länder in der Bundesrepublik Deutschland
IVD/Statistik(2009b) Sonderpädagogische Förderung in allgemeinen Schulen (ohne Förderschulen)2007/2008,
Bonn, den 18.03.2009.
- 千賀愛・安井友康(2008) ドイツ・ニーダーザクセン州特別支援学校における発達障害児の支援ーヤーヌシ
ュ・コルチャック特別支援学校におけるセンター的役割と移行支援を中心にー、北海道特別支援教育研
究、第2巻第1号、45-57.
- 島根県立安来高等学校 <http://www.yasugi-hs.ed.jp/index.php?view-427> (2010年6月10日現在).
- 静岡県東部養護学校伊東分校 <http://www.shizuoka-c.ed.jp/tobu-sh-itohb/>
- Statistisches Bundesamt(2008) Statistisches Jahrbuch 2007 Für die Bundesrepublik Deutschland.

安井友康・千賀愛(2007) ドイツ・ベルリン市州におけるインクルーシブ教育ーフレミング基礎学校の実践から,北海道教育大学教育実践センター紀要、No.8, 109-117.

安井友康・千賀愛 (2008) ドイツ・ベルリン市州の移民・貧困地域におけるインクルーシブ校の実践ーヴェッディング基礎学校の取り組みー、北海道教育大学紀要 (教育科学編)、第 59 巻第 1 号、163-177.

安井友康・千賀愛・山本理人(2009) ドイツ・ベルリン市州のインクルーシブ・スポーツ授業ーフレミング基礎学校の取り組みからー、障害者スポーツ科学、第 7 巻第 1 号、93-106.

(安井 友康 札幌校教授)

(千賀 愛 札幌校准教授)

(山本 理人 岩見沢校准教授)